HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ヒンドゥー文化と東南アジアにおける観光資源
著者	中鉢，令兒
引用	北海商科大学論集，8(1)：84-100
発行日	2019-02

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

受理日：2019/2/20

ヒンドゥー文化と東南アジアにおける観光資源
The Hindu Culture and Tourism Resources in the Southeast Asia

中鉢　令兒　CHUBACHI　Reiji

要旨

本論文は、2011 年から 2018 年までの 7 度に渡るフィールド調査の結果を基にし、ヒンドゥー教が東南アジアの文化形成に大きく寄与したことをまとめたものである。これらのフィールド調査によって、東南アジアの多くの遺跡で、ヒンドゥー教の神話を表象するラーマーヤナの影響が確認され、特にヒンドゥー教の神であるハヌマーンの活躍の場面が多くみられることが示された。また宗教的変遷があった国であっても、ラーマーヤナにあるヒンドゥーの世界観が伝統芸能の中に残っているため、ラーマーヤナの知識は、東南アジアの観光資源を理解するうえで有用なものであることが明らかになった。

キーワード：ヒンドゥー教、ラーマーヤナ、ハヌマーン、観光資源

Abstract

This article summarizes the contribution of Hinduism to cultural formation of Southeast Asia based on the results of 7 field surveys given from 2011 to 2018. These field surveys confirmed the trace of the influence of Ramayana, which is a group of myths that represents Hinduism, in many ancient sites in Southeast Asia; and also showed that in particular, there are many scenes depicting activity of the Hindu god Hanumān. Moreover, it was clarified that knowledge of Ramayana is useful for understanding the tourism resources of Southeast Asia, because the Hindu world view is represented by Ramayana, and remains important in the traditional performing arts, even in the country undergoing religious transition.

Keywords：Hinduism, Ramayana, Hanumān, Tourism Resources

1.　はじめに

今日東南アジアは、南国の開放性や寛容性の高い風土と、安価なリゾート系宿泊施設によって多くの観光客を誘客している。他方多くの世界文化遺産や文化遺跡が存在する地域でもある。しかしその多くの遺跡は、西洋文化でもなく、北東アジアの文化とも異なる形式を持ち、理解しがたいものが多い。各種ガイドブックの解説では、それなりに説明され、納得はするが、統一した理解に乏しく、感性的体感で満足するのが一般的である。その根底には、東南アジアが中国文化と異質なインド文化に多くの影響を受けているということがある。インド文化圏では、紀元前 15 世紀にアーリア人が侵入しインダス文明を破壊しヴェーダ文化が形成された。ヴェーダ文化を展開したさせたウパニシャッドの哲学は、ヨーガの思想やヒンドゥーの思想を包括している。紀元前 4～5 世紀にヒンドゥー教が宗教として成立し、紀元前 2 世紀以前に派生した仏教、ジャイナ教などが重層化している文化構造である。この重層化した文化の伝播の波及のタイムラグが地域独特の文化を生み出している。すなわち地域文化の牽引であったり、鬩ぎ合いであったりである。前稿[1]では、インド北部とカトマンズ盆地を中心にヒンドゥー教と仏教の文化的影響を整理したが、本稿では、デカン高原及び、インド南部と東南アジア全体を俯瞰する。最後にヒンドゥー教文化の東南アジアに対する影響について若干の考察を加える。もって観光研究に寄与できれば幸いである。研究内容としては、多くの未調査と未確認箇所があるが、年齢的限界を感じ後進の研究者に委託する。この地域の研究は、研究資金の潤沢さはそれほど必要ではないが、その反面、長期の健康維持と文化適応力が要求され、柔軟な姿勢の調査が必須であることを付記しておく。

2.　調査期間と概要

本研究は、東南アジアという広域であり分割された先行研究を統合的にまとめたオフィス・ド・リブール（Office du Livere S.A.）等の「アジア・美の様式（La granmmaire des formes et des styles.）」を指針とした。この書籍は調査研究者に教科書的に活用されている。各国の図版の前に大まかな概要が示され、その翻訳者は、その領域の研究者が担当している（石澤良昭、関根昭雄、川越泰博らである）。本研究は、事前に形態予測をしておき、各種写真集で対象遺跡の詳細を把握しておいた。学術調査記録書である「ボロブドール」（伊東照司[2]）「エローラ」（佐藤宗太郎[3]）、木村次郎[4]や並河萬里[5]などの調査写真・記録集によってある程度の必要写真を措定し調査に出向いた。他方論旨の進め方は、この地域を精力的に研究している岩本祐のラーマーヤナ解題（1980）を参考に進めた。岩本の研究から 1 つのテーマで進めないと 5～10 年で纏まった結果が視だせない点を認識した。こうした点を相互に考慮し遺跡で明確に識別できる猿のハヌマーンと大弓を引くラーマを中心に採取した。したがって、本研究は、アジア・美の様式の図版と補足資料、岩本裕論文を基に実証的研究を進めたものである。本論の全写真は、筆者の調査時の記録写真である。また世界文化遺産アジャンタの壁画は、調査時点では、フラッシュを用いない限り許

されていた。調査対象地域とその期間は下記の示すところである。

カンボジア（シェムリアップ）：アンコール・トムとその周辺：2012.1.5～2012.1.8

インドネシア（ジョグジャカルタ）：ジョグジャカルタ周辺：2017.8.10～2017.8.24

（バリ島）：全域 2011.9.3～9.9　ウブド、デンバサール周辺：2017.9.8～9.13

ネパール（カトマンズ、バクタプル）：その周辺都市：2016.8.9～8.22

北インド（デリー、ジャイプール、ハルドワール）：都市域：2016.12.28～2017.1.8

西インド（ムーバイ、アウランガーバード）：都市域と周辺村落：2017.12.26～2018.1.9

南インド（チェンナイ、ハンピ、マハーバリプラム）：都市域と村落全域：2018.8.25～9.9

3.　観光活動の原点

3.1.　体験による生活世界の拡張

生活世界とは、人が日常を過ごしている世界で日々関与している世界である。時として非日常性を求めて旅に出るが、多くが日常性の根幹を揺さぶる場所ではない。江戸時代の幕末期では、西洋文化がその根幹を揺さぶるものであり日常の概念が大きく変化したが、1945 年まで、封建社会の日常がまだら模様に残って存在する日本特有の文化を形成してきた。近くて遠い国である東南アジアの文化は、その多くがインド文化圏と同質と思われがちだが、東北アジアの生活世界とは全く異にしている。中国もインド文化に深く影響されているが、仏教が中国化されて我が国に伝わった。代表的例が、「西遊記」の孫悟空である。このモデルは、ラーマーヤナの猿のハヌマーンである点が多く指摘される[6]が、呉承恩が西遊記で登場させた謂れは知ることはできない。スリランカを経て仏教の影響を受けたインドネシアのプランバナンのロロ＝ジョグラン寺院（9 世紀）に見られるラーマーヤナの浮彫には、ハヌマーンの活躍があり、広域に伝承されていたことが窺える。これらの点を俯瞰的に考察すれば、唐での物語化（疑似イベント化）が、本来のラーマーヤナを変形させ、さらに疑似イベント化が重ねられることにより全く解りえない世界を作り上げたと指摘できる。他方 90%近くがイスラム教徒のインドネシアでは、ワヤン、レゴンダンスなどの芸能世界でヒンドゥー文化を継承し、生活世界を拡張しているのが対照的である。9 世紀ごろまで、中部ジャワサイレンドラ王国が地域を支配しており、この国は、ヒンドゥー教と仏教が生活規範であった。しかし 13 世紀からイスラム化が始まり、16 世紀にイスラム王国が誕生した。北部ジャワ島海岸のドゥマック王国（1504 年建国）と中部ジャワのマタラム王国（1596 年建国）である。しかし 13 世紀のイスラム教布教にワヤンが用いられたことがラーマーヤナの芸能が今日まで残る背景にある。ワヤンで用いられるグヌンガンはヒンドゥー世界の象徴であり、イスラム世界でも生き続けている文化（6.1 参照）であることを示している。

3.2.　R.バルトの神話作用

東南アジアでは、ヒンドゥー教が衰退した国も多いが、ヒンドゥー文化は神話世界で継

承されている。即ち記号的表象的に理解される神話作用が機能している。バルトは、ある時代の概念が作り出す形態は、意味されるものと分かち難く結びついており、その概念世界が変化しても国語の時代[7]が続いたので意味表象は、神話のようになって残ると指摘している。インドネシアのグヌンガンがその例にあたる。日本もヒンドゥー文化の痕跡はあるが、国語の時代がないので多くの場合認識はされていない。その代表的なものが、前述のハヌマーンである。古代コーサラ国の王子の伝説をもとに成立した叙事詩「ラーマーヤナ」の主人公ラーマを助けるハヌマーンは、中国、日本では、三蔵法師の召使としての孫悟空として知られている。ラーマは本来神ではないが、後にヴァシュヌの化身として妻シーターとハヌマーン、実弟ラクシュマンとともに祀られることが多い。14 世紀から 16 世紀にかけて南インドを支配したヴィジャヤナガル王国の首都ハンピは、1565 年ターリコータの戦いでムスリム 5 王国の連合軍に負け、略奪と荒廃が進んだ。しかし、1513 年から 1538 年に建てられたアチュタラーヤ寺院の Mandapa と塔門には、ハヌマーンの浮彫が多くみられる。写真 1 は、ハヌマーンが、毒消しの薬草を探すのに手間取り山ごとラーマ王子の下に行く場面（ラーマーヤナ 6 篇）を象徴化した内容である。またラーマを祀る寺院のハザーラ・ラーマ寺院には、ハヌマーンの浮彫（写真 2）が多くみられ、16 世紀には、庶民の信仰の対象になっていた点が指摘できる。

写真 1 塔門のハヌマーン
（アチュタラーヤ寺院）

写真 2　ハヌマーンの浮彫（ハザーラ・ラーマ寺院）

4.　差異共存の観光資源

4.1.　エローラの構成

6 世紀から 10 世紀にかけてデカン高原に開窟されたエローラは、ヒンドゥー世界とそこから派生した宗教施設群である。最大規模のカイラーサナータ寺院（16 窟）は、29 窟までの開基が 6 世紀から 9 世紀に含まれる。少し離れた第 30 窟～34 窟までがジャイナ教窟で、その開基は 8 世紀～10 世紀とされている。これらは全て石窟寺院であるが、内部空間は大きく異なる。この 3 つの宗教は、歴史的経緯から俯瞰すると、ヒンドゥー教から派生した宗教であり、生き方の選択の差異から生まれたものであって、相互にリス

ペクトしていることが窺える。ヒンドゥー教の分裂の背景には、教義である神への道を 3 つ説いている点に依拠している。タゴール国際大学旧学長 K.モーハン・セーン（1961）は、この 3 つの道を「知識による道（jñāna）」、「行為による道（karma）」、［信愛の道（bakti）］[8]と要約し、信仰のみを求める多くの宗教とは異なり、神へ道への多様性のある宗教概念であると指摘している。この多様性のある道は現在まで国を超え継承されている。事例として、カトリック教徒の「マザー・テレサの死者の家」の創設時、異教徒のヒンズー教寺院のみが快く設置を可能[9]にした事がよく知られている。この例は、インドに限らずネパールのヒンドゥー教寺院（パシュパティナートの死者の家）でも継承されており、神への道の多様性を基本的枠組みとしていることが理解される。また、この石窟寺院群の存在は、これらの宗教の寛容性を示している。

4.2.　ヒンドゥー教寺院と宗教特性

ヒンドゥー教も他の宗教と同じく「信愛の道（バクティ）」が中心である。その背景には、知識による道、行為による道を追求するには、金銭的余裕と時間が必要であり、大衆には現実的に不可能であり、彼らは、必然的にバクティを追求した。また 10 世紀頃から化身（avatāra）の思想が発達しバクティの道がさらに活性化した。この化身化が、行為に対する具体的実像を示す神になりバクティの象徴化が進んだ[10]。この化身信仰が、ヴァシュヌ、シヴァ、カーリーなどの神である。また神ではないが、ある行為に対する具体的実像を示す、クリシュナ、ラーマ（写真 3）などが信仰の対象になり、エローラ第 16 窟の浮彫にも視られ、身近なヒンドゥー教の象徴化が進んだ。こうした対象化の代表的なものとして挙げられる。ラーマーヤナ、マハーバータラ、バガヴァッド・ギーター（Bhagavavad-Gitā）などの物語が具体化のカギとなった。ヒンドゥー教では、理想的人生を「学生期」「家住期」「林住期」「遊行期」と 4 期に分け、各期の務めを立てており、行為を重視し社会生活の理想を懸命に実現することを目標としている。紀元前 2 世紀～2 世紀の 400 年の間に形成されたバガヴァッド・ギーターは、物語によってヒンドゥー教徒の社会生活の規範を示している。

写真 3　ラーマーヤナのハヌマーンの猿軍と羅刹の戦い(16 窟)

その根幹は、「活動による義務の履行」「無私であることの必須」である。また行為の再生からの解脱（moksa）を完成の境地としている。エローラ最大の石窟寺院カイラーサナータ寺院は、成熟したヒンドゥー教の象徴的要素を示している。

4.3. ジャイナ教寺院と宗教特性

シャイナ教は、不殺生、不妄語、不偸盗、不邪淫、無所有の 5 戒を厳守し、ヒンドゥー教と同じに解脱を目指す宗教だが、戒律の差異が存在する。特にすべての生き物に対する不殺生戒は、信者の生業を限定し、信者は農業・林業は営むことが出来ず、その多くが商業従事者となっている。開祖であるニガンタ・ナータプッタは、王族の子として生まれ（紀元前 444 年）、修行集団のニガンタに属し悟りを開いて「ジナ（勝者）」（写真 4）となった。彼はマハーヴィーラーとも呼ばれたが、彼以前に 23 人の解脱者がいたと言われている。最も古い教義書は、4 世紀ごろのウマースヴァーティー（真理の意味の認識）である。エローラ第 32 窟には、24 人の聖者の壁画像がみられる。ジナの佛像は、無所有を表す特異な姿の裸像である。

写真 4　ジャイナ教救世主（32 窟）

写真 5　ジャイナ教 32 窟入口の塔

4.4. 仏教寺院と宗教特性

釈尊の入滅後即座に行われた結集は紀元前 383 年で、釈尊の教え（経典）はアーナンダが唱え、教団の規則はウパーリが唱えた。その後 100 年程度過ぎた頃から意見の対立が目立つようになってサンガの分裂（根本分裂）が起き、釈尊の戒律をあくまで守るべきとした「上座部」と運営の改善を推進した改革派である「大衆部」とに大別されている。エローラ第 10 窟（写真 6）にある仏教の象徴的仏塔と佛像が単独で成立しない過渡的段階の石窟寺院は、佛像が単独で存在する第 2 窟の寺院（写真 7）とは異なっている。また約 300 ㎞離れたアジャンタとは異なり、説話的要素はほとんど見られない。エローラ第 11 窟（写真 8）は、修行僧の僧房が並び、啓蒙的要素は少なく、自己救済を中心とした小乗仏教的であり、修行の場として位置付けられる。

写真 8　龕の中の佛侘（第 2 窟）

写真 7　仏塔と佛像が未分離（第 10 窟）

写真 6　左右に僧房がある（第 11 窟）

5.　アジャンタの遺跡における考察

5.1.　大乗仏教の成立

大乗仏教の起こりは､釈尊の入滅の 300～400 年後に興ったとされる。本来釈尊の説法は、釈尊の入滅後に最後の弟子であるアーナンダが編集した「阿含経」にまとめられたが、社会の進展に不整合の箇所も多く、新たな解釈として、般若経、法華経、華厳経、無量寿経の経典が釈尊の説法として流布されていった。そして入滅後約 100 年を経たころに起こった根本分裂のどの派にも属さない新仏教が約 100 年頃に出現した。一般にこの仏教を大乗仏教と言い、ダルマ・バーナカによって流布された。ダルマ・バーナカは、竹村[11]（1992）によれば、正式の僧ではなく日本の勧進聖、念仏聖、歩き巫女と言った存在と同じであったと指摘されている。

5.2.　ジャータカと壁画

アジャンタは、インドの古い仏教石窟寺院群であり、当時の大乗仏教の解釈が分る壁画を数多く擁している。インドデカン高原のワゴラー川の浸食によってできた馬蹄形の渓谷に創られた 30 の石窟寺院から形成されている。その発見は、1819 年にイギリスの将校が虎狩に来て偶然見つけたもので、1844 年のロバート・ギル少佐による模写が最初であるが、1851 年以降水晶宮で展示され、1866 年の時火災で焼失した。第 2 回目の模写は、1872～85 年の J.グリフィス（ボンベイ美術学校）とその学生によるものがあったが、1885 年のビクトリア・アルバート・ミュージアムの火災で多くが焼失した。

1900 年代に入りカラー写真の技術も向上し、図入り図書が多く刊行された。本論では筆者の記録写真と、高田修監修著のアジャンタ壁画（2000）を参考資料として参照した。これらの石窟寺院では、すべて佛教窟で開窟した時期が 2 つに分かれる。第 1 期は、1 世紀～2 世紀に創られ、佛像が出現していない無佛像の形で創られた、6、8、9、10、12、13 窟である。9、10 窟は祠堂窟（写真 9，10）で、12,13 窟は僧院窟である。第 2 期は、5 世紀半ばから 6 世紀に至って創られた。第 2 期窟は、釈尊の過去世物語（＝本生譚）を壁画の題材としたものが多くみられる。または、壁画があっても剥離が激しく全体像が読み取れないものも多い。本稿では、読み取り可能で明らかなものを中心に取り上げる。

写真 9　佛像から分離した仏塔第 10 窟

写真 10　仏塔を囲む柱に描かれた佛像

5.3.　カルヤーナカーリンの出家

写真 11 は、釈尊の出家の場面とオーバーラップするが、釈尊が人知れず愛馬カンタカに乗って馬丁一人と宮廷を出たという伝説とは違い、明らかに違う逸話と気が付く。カルヤーナカーリン（善事）王子本生（写真 11）で、それをほとんど認知していない人にとっては、少し戸惑う。盲目の王子が「婚約の女王の『真実の物語』の誓いによって開眼し」[12]、晴れて母国に女王と帰る（写真 11）ところである。この壁画には、「王子の出家」といった立川武蔵らの異説も散見されるが、背景には 4 つの漢訳[13]によるものがあると指摘できる。

写真 11　カルヤーナカーリンの母国への帰国（1 窟左廊）

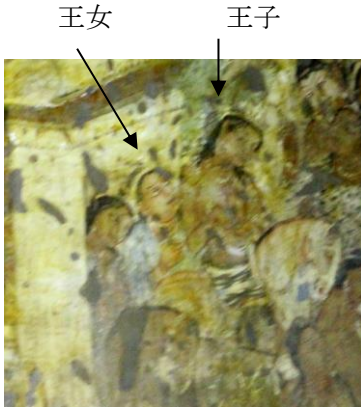

写真 12　部分詳細

5.4.　シンハラ物語

シンハラ物語は、身近な説話ではジャータカ（夜叉女の島）に見られる。詳しくは、六度集経に記載されているが、要約すると以下の通りである。難破した商団が羅刹島に 500 名が漂流し、欲望を満たす歓迎を受けるがシンハラはかつての遭難者が羅刹に食べられる（写真 13）のを知り、この島の女性たちが人食い羅刹であることを悟り、250 名の仲間と脱出し故郷に帰る。追ってきた羅刹は、王宮殿の門前で彼らを食べるために宮殿の者に取り入り、宮殿の者はシンハラが止めるのも聞かずに羅刹を招き入れた。翌日シンハラが駆けつける前に宮殿の者は全滅し、生き残った家臣たちはシンハラを王に推挙した。その後王になったシンハラは、羅刹島に討伐に出かけ征服した。

この物語には、幾つかのヒンドゥー教の影響が見られる。羅刹女が人を食うといった理解である。当時民話化さていたラーマーヤナの森林の巻にあるラーマと羅刹の戦いで、羅刹の意味を事前に理解させている。また羅刹の王とラーマが戦うことによって羅刹女等の快楽的生活がイドラ（帝釈天）の理想とは違うことを、ジャカータによる暗黙の了解事項としている。写真 14 は、シイハラ王が、羅刹島に討伐に出かける図である。

写真 13　羅刹の島で、乗組員が食われる場面（17 窟右廊）

写真 14　羅刹退治軍の出撃の場面（17 窟右廊）

6.　ボロブドールにおける考察

6.1.　イスラム教とワヤン

インドネシアでは、1970 年代までワヤンが人々の娯楽として盛んであった（宮崎、1999）[14]。このワヤンは、イスラム教徒の伝道に使われていたため、イスラム教徒が 88%を占めるインドネシアでは、つい最近まで一般的な娯楽であった。ワヤンの題材は、ラーマーヤナが地域の民話と融合し伝承し続けられたと岩本（1980）は指摘している。またその過程で、イスラム教布教（13 世紀）以前のワヤン人形（写真 15）は、現在のデフォルメされた人形（写真 16）ではなく、具象的な形態であった（宮崎、1999）とされている。しかし、類似した表現の事例がバリ島の旧裁判所であったクルタ・ゴサに残ってい

て、その形態はイスラム的とは言い難い。バリ島は、交易拠点としての歴史もなくイスラム化がほとんどない。独立後も観光政策によって、ヒンドゥー教の島として保護されていた。クルタ・ゴサにある 17 世紀のカマサン様式の天井画（写真 17）には、デフォルメされた形態に類似した人が描かれている。たとえワヤン人形がイスラム化されたとは言え、物語で重要な役割を果たすグヌンガンは、ヒンドゥー教の世界観を象徴している。

写真 15　13 世紀以前のワヤン人形（遺跡公園内サムドララクサ博物館）

写真 16　ワヤン人形（ソノブドヨ博物館）

写真 17　クルタ・ゴサのカマサン様式の天井画

6.2.　記号としてのグヌンガン

ワヤンの物語で頻繁に使われるグヌンガンは、森の場合は山を象徴する。古代インド説話のメール山（仏教の須弥山）を意味するともいわれる。グヌンガンの演者側（写真 18）には、ワヤンでは解りづらい内容が描かれている。それを読み解くと中央の樹は、生命の樹、知恵の樹,菩提樹ともと言われ、墓地を守るカンブジャの樹など諸説がある。暗黒の世

界の門の、ラクササは、病と死を看取る森の守護神でもある。両側には、虎と聖牛ルンブ・アンディニが視られる。猿、蛇、鳥、虎は、ルンブ・アンディニの弟子たちである。このカンブジャは、時としてプトロ・グル（インドのシヴァ神）という宇宙支配の至高神の象徴となる。即ち、ラーマーヤナの世界が広がる。ワヤンの始まりは、このグヌンガンとガムラン音楽と地語りから始まる。ここに接点としてのヒンドゥー文化の理解がもたらされる。それは、物語がラーマーヤナの世界であることのサインでもある。

写真 18　グヌンガン表面（ソノブヨド博物館付設劇場公演前展示）

写真 19　グヌンガン影絵の状態（ソノブヨド博物館付設劇場公演前展示）

6.3.　ボロブドールの仏教説話

ボロブドールは、1814 年に S.ラッフルズが発見し、調査（本格的調査は、20 世紀以降）し、保存に努められた。ボロブドールの廻廊の浮彫では、第一廻廊の上段で釈尊の誕生から仏滅までが描かれ、下段では前世の善財童子の解脱までのプロセスとして、善財童子が賢者の 53 人に会い、最後の菩薩に会って悟りを既に開いていることを知らされるが、30 番目の賢者としてシヴァ（大天）に会うということが描かれている（写真 20）。これは、釈尊の前世としてヒンドゥーとの関わり示している。また天国の木、天上界の構図がヒンドゥー教の表象を引用している。インドネシアでは、ヒンドゥー教は地域の信仰されている神と結びつき、インドネシア独自のヒンドゥー教として発展してきた。このため遅れて大衆化が始まった仏教は、ヒンドゥー教の表象を借りることとなったのである。（写真 20）はその例と言える。

写真 20　三叉戟とシヴァ（第二廻廊）

7.　アンコールワットとの周辺地区（カンボジア）

7.1.　アンコールワットと乳海攪拌

アンコールワットには、ラーマーヤナ伝説の多数の浮彫が視られる。現地では、日本人にとってラーマーヤナは異文化の文学であり、特殊な人を除いて理解に乏しく、単なる装飾として認識される。写真 21 は、第二廻廊の入り口の破風にラーマ（ヴァシュヌの化身）がガルーダに乗って、悪魔の軍勢と戦う姿が浮彫として描かれたものである。第一廻廊の壁面（写真 22）に見られる場面は、ラーマーヤナの中で、ラーヴァナを追って奪われたシーターを助けるために、ラーマが猿王スグリーヴァに助けを求め、その時命令を受けた部下のハヌマーンとその軍団の浮彫である。ここでもヒンドゥー文化の逸話が浮彫として飾られている。

写真 21　第二廻廊塔門派風のガルーダの肩に乗り弓を引くラーマ（ヴァシュヌの化

写真 22　第一廻廊のラーマを助ける猿の軍団

7.2.　アンコール・トムの城門

ジャヤヴァルマン 7 世によって建立されたアンクルトムの城門に架かる橋は、乳海攪拌を表したものと言われているが、「都とその濠とをメール山と宇宙の海を表し（写真 23）乳海攪拌の神話を表現」と G.セデス（1947）は指摘している。ラーマーヤナでは、「龍王ヴァ―スキを綱としてマンダラ山を棒として計り知れないほどの力で乳海をかき混ぜた。（写真 24）」[15]となっている。この点を検証したが、この橋は、部分的に崩壊はしているものの概ねその全体像は G.セデスか指摘するような形態である。ここでもそのモチーフは神話作用を意図している。また、アンコールワットに多数見られる天女は、アプサラス（写真 25）を表現したものと指摘できる。「1 千年経つと(中略)美人のアプサラスたちも現れた。」とラーマーヤナで綴られ、既に神話的位置づけを得ていることが指摘できる。G.セデス（1947）は、当時の支配者ジャヤヴァルマン 7 世が、都それ自体を神話世界にしようとしたと指摘している。

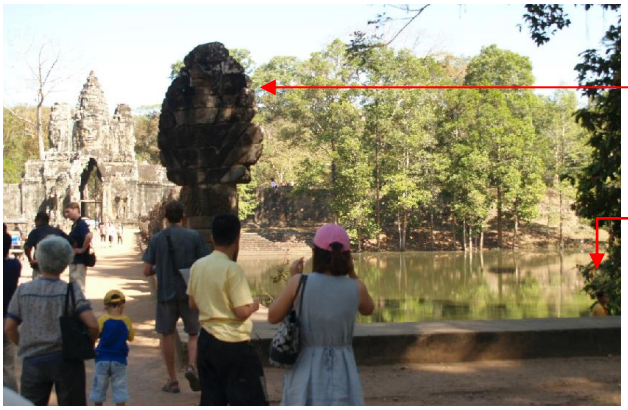

写真 23　アンコール・トムの南大門

写真 24　神々のヴァ―スキを綱にしての攪拌

写真 25　随所にあるアプサラス（アンコールワット）

8.　ヒンドゥー教の現状

ヒンドゥー教の現状を体感することは、寺院の本堂が異教徒に開放されておらず難しい。ハンピ村のヴィルーパークシャ寺院（写真 26）は、シヴァの化身とされているヴィルーパークシャ神を祀る寺院であり、僧侶も在住して多くの巡礼も訪れるヒンドゥー教寺院である。他方ハンピ村は 14－16 世紀に南インドを支配したシーターヴィジャヤナガー王朝の首都として栄えたので遺跡も多く、観光都市化が進み、ヴィルーパークシャ寺院も一部が観光客にも解放されている。高さ 50m の塔門を入ると 100 コルムホールがある広場に出る。ここで来訪者は、下足を脱ぎ先に進む[16]。中央に本殿前の前室があるが、この 8m に及ぶ天井画は、ヴィルーパークシャとパムパ（写真 27）、ラーマとシーターの結婚の図が描かれている。その奥に本堂があるが信者のみの拝観となる。北側の入り口から出ると、周囲にナンディを祀る祠と沐浴場がある。ここでヒンドゥー寺院の基本形を理解することが可能である。すなわち、ハンピの歴史とヒンドゥーの神々の完全な姿を把握し、損傷が目立つ遺跡の認識を助ける役割を持つ博物館の役割を担う場所である。

写真 26　ヴィルーパークシャ寺院の塔門

写真 27　ヴィルーパークシャとパムパの結婚(前室の天井画)

9.　神話作用と真正性

東南アジア諸国は、ヒンドゥー文化を過去から継承したが、多くの国が異なった宗教を継承した。インドネシアでは、バリ島を除きイスラム教徒の国であるが文芸としてヒンドゥー文化（ラーマーヤナ）が、独自の伝統文化として存続している。カンボジアでは、観光遺跡としてその意味と内容が保護継承されている。南インドでは、アクセスの悪さから、旅行業社の団体旅行の企画の余地がなく、観光資源が疑似イベント化されていない。観光客は、各観光資源への移動が三輪タクシーに頼ることとなり、観光資源は、地元運転手の生活世界と神話化された内容の解説によって理解されることとなる。チュンナイ 60 ㎞南方に位置するマハーバリプラムは中央部に岩山があるが、この岩山には、7 世紀前後の寺院群（写真 28）があり、地元の行楽公園となっている。そこでは、子供にヒンドゥー文化の謂れや内容を教える親子の姿が見られる（写真 29）。さらに歳を重ねた人々は、ファイブタラなどの 7 世紀前後の寺院の見学をしている。この地域の人々は、ヒンドゥーの神々の生きている生活世界を正しく継承している点が指摘できよう。

写真 28　イスワラ寺院　竜王の上で眠るヴァシュヌ

写真 29　パンチャ・パーンダヴァ・マンダパの親子　（羊飼いクリシュナの幼少の浮彫）

東南アジアの遺跡や文化には、ヒンドゥー教を中心としたインド文化の影響が深く存在している。具体的には、叙事詩ラーマーヤナが伝承され地域の芸能や土着宗教の骨格となり発展してきた。また東北アジアにおいては、異なった枠組みで伝えられたが、登場人物は、ラーマーヤナの性格を反映している。代表的な例がラーマーヤナのマヌハーンと、西遊記の孫悟空である。岩本（1980）は、ラーマーヤナと中国文化の影響を「西遊記の著者である明時代の呉承恩に孫悟空のルーツを聞く術もない。」[17]と結論付けている。しかしながら、ハンピのレリーフは、なじみのある孫悟空の姿であり、表象されたものの同一性は否定できない。インドの大乗仏教の説話は、古い民話を下敷きにしている。この釈尊の前世を、日本では本生譚（ジャータカ）としている。しかし日本や韓国など東北アジアでは、インド民話が存在せず内容を理解させるためには、本生譚の布教活動が必要であった。こうした背景が日本仏教の独特の環境を作った。また東南アジアの文化の基礎知識のない観光客には、理解に苦しむことが多いが、タゴールの詩集の如く魂に訴えることも多

い。この 10 年余りに及ぶ東南アジア調査結果を、ラーマーヤナの文献を手掛かりに整理したが、インドの古代民話に基づく仏教説話との接合が未整理で更なる遂行が必要と痛切に感じる。

註

1. 中鉢令兒（2018)、アジア観光とヒンドゥー文化（Ｉ）：A. シュッツのレリヴァンスを視点として、北海商科大学論集 7、(1)、P.P.60-71
2. 伊東照司（1998)、ボロブドール、山川出版
3. 佐藤宗太郎（1977)、エローラの石窟寺院、佐島出版
4. 木村次郎（2000)、アジャンタとエローラ、集英社
   （2001)、ブッタの教え、集英社、
5. 並河萬里（1991)、美の回廊をゆく、日本放送出版協会
6. 岩本祐（1980）解題　ラーマーヤナ、東洋文庫、P.336
7. 官軍板垣退助は、江戸幕府の残党を追って日光の東照宮に逃げ込んだ会津藩を成敗しに行くが、300 年平和をもたらした家康の廟を戦場にできず、大谷川をはさんで対峙した。板垣は、家康を身近に感じ戦場にしなかった。この理由は、日常の概念で語ることが出来たが、平成に生きているものは、家康の神話（日光東照宮の表象）なしで重要性を語ることが出来ない。前者を国語世界、後者を神話世界と R.バルトは定義した。
8. K.M.Sen（1961)、Hinduism、Penguin Books、P.9
9. 沖守弘（2002)、マザー・テレサ、くもん出版、P.18
10. K.M.Sen（1961)、8 と同じ、P.10
11. 竹村牧男（1992)、「覚り」と「空」―インド仏教の展開（講談社現代新書)、講談社、P.113
12. 高田修（2000)、アジャンタ壁画、日本放送出版、P.P.62～63
13. 高田修（2000)、同上、P.60
14. 宮崎恒二（1999)、インドネシア（暮らしがわかるアジア読本)、河出書房新社
15. ヴァル―ミーキ、邦訳岩本祐（1980)、ラーマーヤナ、東洋文庫、P.135
16. 信者は無料下足預かりであり、観光客は有料下足預かりである。2018/9/1 の 11 時から 12 時の信者:観光客比率は、約 2:1 であった。
17. ヴァル―ミーキ、邦訳岩本祐（1980)、15 と同じ、P337

引用文献およびデータ

1. ナイジェル・バーリー（1991)、邦訳　柴田裕之（1999)、スタンフォード・ラッフルズ、凱風社
2. ジョルジュ・セデス（1947)、邦訳　三宅一郎（1993)、アンコールの遺跡、連合出版
3. 長谷川明（1987)、インド神話入門、新潮社
4. 山室静（1979)、インド昔話抄、レグルス文庫、第三文明社

➢ 注で記載した書籍は省いた。

謝辞　以上のような研究を自由にできた環境を提供してくれた学校法人北海学園に、研究の節目に当たって謝意を表します。